

私が厚労省に入つて間もないころのことです。自分の仕事が終わつても、上司の課長がいる間は皆、帰らないのです。私には小さい子供たちもいましたし介護が必要な母もいたので、仕事が終わればすぐに帰宅していました。それを課の職員からとがめられたのです。

これに対して私は、

「なぜ自分の仕事が終わつたのに、帰つてはいけないのか」

と言つて口論になつたことがあります。後で、

「あいつは組織をわかつていない」

と言われているのを耳にしたときは、さすがに腹が立ちました。

厚労省流にふるまうとしたら、上司の仕事が終わらないうちは自分の仕事も終わったことにはならないのです。極端な例では、お酒好きの課長がいたら、毎日自分の時間と家族を犠牲にしてお付き合いをしなければならないということになります。上司のご機嫌を取るためにだけ必死になる組織に国民の健康や安全は任せられないと思いました。

自分がやりたい案件を通してもらうには、課長や総括補佐に気に入ってもらわなければいけません。そのために課長が飲みに行くと言えば、みんな従います。課長に気に入ってもらえば当然、総括補佐も気に入ってくれるからです。課長が女の子のお尻を触ろうが何しようが、皆見て見ぬふりです。それは課長個人としての人間が怖いのではなく、課長というポストが恐ろしいからです。そんな日常の光景を見て、本当に驚きました。

厚労省の仕事のほとんどは内部の調整です。調整とは何のことかという、何かをやりたと思ったとき（起案）、係員→係長→課長補佐→（室長）→課長→企画課長→（部長）→局長といったような延々と続くOK（決裁）を取つてゆかなければなりません。その決裁を取るまでの間には、根回しやらご機嫌取りやらが入ってくるのですから、大変なエネルギーを使います。

重箱の隅をつつくような“てにをは”の直しも入ります。そのたびに、関係者のために何十部というコピーを作らなければならないのです。まったくもつて、資源の無駄、エネルギーの浪費です。霞が関からコピー機をなくせば、どれだけの二酸化炭素が削減できるのか考えたほうがよいと思います。

そんな中で私は何度も課長や総括補佐とぶつかり合いました。私のことが苦手な課長や総括補佐は“てにをは”攻撃をして、私の室の案件を通してくれませんでした。そのため、私は彼らのデスクの前に行き、

「“てにをは”以外の何が悪いのか、具体的に示してほしい」

と、殴りこみをかけたものです。それに対して、彼らは何も明確に答えてはくれませんでした。

私は何度も検疫所長に「なぜ、そんな無理だと思ふことをできると言うんですか！」と聞き
ました。そのたびに返ってくる答えは、

「私たちは厚労省本省の指示で動いている。本省の指示は絶対だ」
というものでした。

所長のような本省から来た医系技官にとっては、本省に逆らわずに仕事することが使命な
のです。そうすれば自分の出世につながるからです。

本来、現場の役割とは、今起こっていることを中央（厚労省）に伝え、必要があれば改善を
要求することにあると考えますが、あにはからんや百パーセントのトップダウンです。特に本
省から所長が来ている場合は間違いなく、その所長は厚労省の言うなりです。検疫所もその典
型でした。

厚労省の内部で働く人たちが何に主眼を置いて仕事をしているかと言えば、「人と違ったこ
とをしないこと、上司に嫌われないこと」です。

それはとりもなおさず、厚労省の方針がいくら間違つていようとも間違つているとは言わ
ず、ひたすら目をつぶつて仕事を続けることです。年金問題がもはや解決できないとわかつて
いても、解決するという方針がある以上、解決できないということを言つてはいけないという
ことです。

前にも書いたように、決裁はとても大変な作業です。決裁が取れないと、深夜労働になりま
す。けれども、その決裁文書を通させることと国民生活が豊かで安心なものになることは必
ずしもイコールではありません。

多くの場合、無関係です。内部の職員はあまりに決裁を取ることに疲れすぎているので、外
にまで注意を払う余裕がないのです。

ある幹部が、

「私たちは国民に目を向ける必要はない。大切なのは内部のボロがいかにか外に出ないようにす
るのだ」

と言うのを聞いたとき、私は目の前が真っ暗になりました。

こうした中で、私のように自分の意見を言つたり上司と敵対したりする人間は中枢から外さ
れてゆきます。あるいは、耐えきれなくなつて自ら辞めてゆきます。そうでなければ、精神的
に破綻をきたしながら、ただ席に座っているだけの人もいます。実際、「厚労省職員の100
人に1人がうつ病にかかっている」と言われており、一般集団より多いのです。

そうすると、どんな人間たちが残るでしょうか。

上司におべつかを使い、間違つていると思つていても意見を言わないイエスマンだけが残り
ます。彼らの生きる目的は、国民生活をよりよいものにするのではなく、自分がいかに高い
ポストに就いて部下を怒鳴り散らし、よい天下り先にありついて安泰な生活を送ることだけ
です。

人間はいやなことをされると、無意識に他人に対して、自分が受けたいやなことをしま
う性質を持っています。子供時代に虐待を受けた経験のある人が成長して親になったとき、自
分を受けた虐待を自分の子供に与えてしまうことはよく知られています。

「厚生労働省崩壊」(木村盛世) 2009.3.30

3
K
私の下についた係長は有能な女性でした。年は私より10歳くらい上でした。

国家公務員には第1種、第2種、第3種というレベルがあります。昔は、上級、中級、初級と呼ばれていたものです。キャリアと呼ばれるのは第1種で、第2種と第3種はノンキャリア（通称ノンキヤリ）として扱われます。私たちのような医系技官は公務員試験を受けるわけではないのですが、技能職としてキャリアと同等に扱われます。

キャリアとノンキャリアの何が違うかという、出世の速度が違います。そして、最終的に到達できるポストが違います。

私と当時の係長のように、年が10歳若くても私は訓令室長で、彼女は係長です。そして、実際可能かどうかは別にしても、キャリアは事務次官、局長にまでなれますが、ノンキャリアは室長、課長になることはまずありません。

すなわち、幹部になるノンキャリアはとても少ないのです。これに加えて女性は男性より出世が遅いので、ノンキャリアの女性管理職はないといったほうがよいかもかもしれません。出世すれば給料が高くなり、最後に到達するポストが高ければ、天下り先もよいところが確保されます。

こうしたキャリアとノンキャリアの歴然とした差のためか、キャリアはノンキャリアをときに出けらのように扱います。

私と係長はとても仲が良かったのですが、ある日、係長がこのようなことを言いました。

「室長に出会ったとき隣の課の課長はあいさつしますでしょう？ でも、私たちなんかには目も合わせませんよ」

びつくりしてそのわけを尋ねると、

「私たちノンキャリアの係長なんて、人間だと思われていないんですよ。ゴミなんですよ」と言いました。

ノンキャリアには優秀な人もたくさんいます。しかし、ノンキャリアというだけで、屋敷も別、飲み会も別です。私が局長に直に話をしただけでも、「とんでもない！」と言われるのですから、ノンキャリアがキャリアの課長に意見を言ったりすることなど許されないわけです。

キャリアの課長以上の「幹部」と呼ばれる人の力は絶対です。そして、その人の決裁が取れないことには自分たちのやろうとしていることはできません。

たとえば、私が2年後に国際会議を日本で開きたいと思つて起案したとしましょう。

長い長い伝言ゲームのような、決裁をもらうまでの過程が必要になります。こうした案件を抱えているときに上司から飲み会に誘われでもしものなら、たとえば子供が高熱を出しているようとも断ることはできません。断れば2年後の国際会議は開催できないからです。それだけ上司のご機嫌を取ることは、業務を潤滑にこなす上で必要不可欠なことなのです。

飲み会に出席するばかりではありません。これは、私がある係員の女性から聞いた話ですが、年に一度の課内旅行で課長にお尻を触られたそうです。驚いた私は、

「なぜやめてといわなかったの？ 怒ってひっぱたいてもよかつたじゃないの！」

と言いましたが、彼女は、

「そんなことしたら、後で書類にハンコを押してくれないなどのいやがらせがきますから、できません」

と言つたのです。

彼女の言葉を聞いて、私は自分がどこで働いているのかわからなくなってきました。確か、厚労省というところではなかつたでしょうか。

「パワハラ、セクハラは犯罪です！」

と言っている監督官庁だつたはずですが……。

検疫所に異動して2年目に総合的な訓練をすることになったのですが、そのときの訓練の様
様を知った国会議員の先生たちから、「新型インフルエンザに関する勉強会の講師として来て
ほしい」という依頼がありました。

国会議員対応となれば地方の検疫所で扱える問題ではなく、厚生労働省本省を通す必要があ
ります。私は電話をかけてきた国会議員にその旨を伝えて、上司である検疫所長にも話をしま
した。

何週間かたつたある日、その国会議員の秘書から電話がかかってきました。「厚労省の結核
感染症課から、あなたの体調が悪いので、勉強会への講師派遣を断ってきた」という内容でし
た。

その頃の私は特に体調を崩していたわけではありませんでした。

よくよく聞いてみると、私が「おめでた」だから講師としては派遣できないという内容だつ
たのです。厚労省からの回答を受けた国会議員の方々が、「妊娠していても勉強会の講師はで
きるだろう」と思い、私本人に直接確かめるように秘書に指示したとのことだつたようです。

私はその話を聞いたとき、少なからずショックを受けました。

私はその10年以上も前に離婚していました。中学生になる娘たちもいます。そういう状況に
ある私が「妊娠している」などという根も葉もないことを国会議員の前で公式に話したという
こと自体、スキャンダラスなことであり、女性蔑視、人権問題にかかわることです。

理由はよくわかりませんが、私を何としてでも新型インフルエンザの講師として派遣するこ
とを阻止したかつたのでしょうか。

もしそうであれば、私が講師としてふさわしくない客観的な事実を伝えるべきだつたと思ひ
ます。その客観的な理由が見つからなかつたため、妊娠などというでつち上げを思いついたの
です。

前にも書きましたが、セクハラ、パワハラなどに関わる問題を扱う省庁でありながら、厚労
省は自分たちが率先してセクハラ、パワハラをやっているのです。このことは、自分たちが何
をすべきかという認識が、厚労省に欠如しているからにはほかならないのです。

握りつぶされた参考人招致

五月二四日の夜遅く、民主党の鈴木寛参議院議員の秘書から電話がかかってきました。「明日の参議院予算委員会の参考人として来ていただくことになっているが厚労省からは話があったか」という内容でした。電話口で私は面食らいました。まったく知らなかったからです。秘書も私以上に驚いていました。それもそのはずです。私の参考人招致の件に関しては厚生労働大臣も承知し、何より翌五月二五日の参考人名簿にはすでに記載されているというのです。

そこで私は、民主党議員秘書の指示に従って、次の日に年次休暇をとり参議院に向かいました。国家公務員は国会の呼び出しがあればそれに応じるのも仕事の一つです。それなのになぜ年次休暇をとってゆかねばならなかったのか今でも不思議ですが……。

ともあれ、私ともう一人の野党推薦参考人は民主党の会議室に通されました。予算委員会の理事と委員がいるところです。そこでなにやら「もめている」という話をされました。どうやら予算委員会の与党自民党(当時)理事が私たち二人の参考人招致を受け入れられないと言っているようです。正確には二人ではなく私のことを参考人として呼びたくないというのが自民党の意向だったようです。予算委員会の理事会は私たち参考人を認めるかどうかという議論を続けていました。そのため予算委員会の開始が一時間以上も延びていました。その後なにやら民主党の会議が始まるということで私たちはその場を追い出され、空いている部屋を転々としたのち民主党控え室に連れていかれました。そこでも会議が開かれるというので隣にある事務員さんたちがいる部屋の冷蔵庫の隣で待たされました。何しろ下手に外に出ると「拉致される!」と脅かされたので、トイレに行くのもお付き同伴でした(誰にどこに拉致されるというのでしょうか)。

やがて民主党の予算委員会の理事から今回の参考人招致はなくなったとの連絡を受けました。しかし、与党も含めて予算委員会として参考人招致を正式に決定したので、後日改めて来ていただきたいということでした。

それにしても民主党の議員が正式に要請し、厚生労働大臣の秘書官も承知し(すなわち大臣も承知したということ)、かつ名前まで正式に印刷物に載った参考人に対してこれほどの妨害をしたなど過去にも例があるかないかの話でした。よほど私に発言されると困る人たちがいたのでしょうか。後で聞いた話ですが、私が招致されるのを聞いて困り果てた医系技官のトップたちが与党議員に手をまわして参考人招致を握りつぶしたとのことでした。そうはいつでも結局は別の機会に参考人招致が実現されることに決定したのですから、彼らの読みは甘かったとしか言えないでしょう。

五月二五日の参考人招致はお流れとなりましたが、後日連絡が入り二八日午前中に改めて審議をやり直すこととなりました。会議の議題は「平成二二年度補正予算(新型インフルエンザ・北朝鮮の核実験と危機管理に関する件)について」というものでした。

民主党側も今回は厚労省に邪魔をさせないぞ! とばかりに直接野党が参考人として呼ぶ形をとりました。こうすることにより厚労省は関与できなくなります。

多くの報道陣を目の当たりにし少々面食らっている中、予算委員会は始まりました。議員の質問に促され最初に右側に座っていた野党参考人が答え、次に私の番となりました。とにかく言いたいことをきちんと伝えようと思い、壇上に立って話をしました。思ったより長くも短くも感じた時間でした。話し終えた途端、野党側から拍手が起きました。「よく言った!」といった声も聞こえてきました。私自身はそれほど大きなことを成し遂げたという実感はなかったのですが、厚労省にしてみれば大変なことが起こったのです。現役の医系技官が政府の政策を批判するなどとは、彼らにしてみれば「あつてはならないこと」だったでしょう。

この予算委員会の審議は全国に放映されました。また、各局がこぞつて「現役検査官が政府を国会で批判」といったようなタイトルでニュース報道をしました。

「厚労省と新型インフルエンザ」(木村盛世) 2009. 12. 20

悪質ないじめをする「病んだ組織」

国会が終わった後の午後、医系技官たちは重要な指令を受けて霞が関合同庁舎五号館を飛び出しました。場所はネットカフェです。やることは2ちゃんねるに「木村盛世」の悪口を書き込むことです。

私は、国会中継の翌日の夜、テレビでの出演が決まっていたのでテレビ局に出かけました。その際ディレクターやレポーターの方たちが2ちゃんねるの書き込みについてどのような状況だったのかを教えてくださいました。「あいつは脳みそがない」とか「どこにも引き取り手がなくて皆が困っているできないやつ」などといったコメントが午後になくさん書き込まれたそうです。しかし、2ちゃんねるに参加している人たちから「お前はそんなこと書くなんで内部の人間だろう」などと反論を受け、次の日には沈静化するという興味深い現象があったそうです。

厚労省内部の書き込みの攻撃先は私個人にとどまりませんでした。「このような発言をすると子供たちもいじめの対象になる。日本は“出る杭は打たれる”社会だから」などという脅しまであったのです。あとから聞いた話では、このような脅迫状を用意したのは厚労省OBだそうですから、リタイア組をも巻き込んだ大掛かりな組織による陰湿な“いじめ”が行われていたのです。こうした内部告発者に対する仕打ちは子供たちによる同級生いじめによく似たものがあります。メールやサイトでの悪口に傷つき自殺する子供たちも後を絶ちません。それもそのはずです。国家公務員として国民のために働くはずの官僚たちが率先してこんないじめをやっているのですから。

インフルエンザ対策より木村封じ

厚労省内部では新型インフルエンザ対策に関する会議が毎日開かれていました。当初は医系技官だけの会議でしたが、五月半ばからは法令担当の事務官(事務系キャリア)も出席するようになりました。しかし国会中継が終わって何週間かは、話し合う議題は「新型インフルエンザ対策」ではなかったそうです。なんと私に対する対策が話し合われていたとのこと。

なんとか木村を黙らせよう、できるものなら辞めさせたい、その一心だったようです。しかし国家公務員を退職させるのはなかなか難しいので、ダメージを与えて自ら退職願を書かせるのが通常考えるやり方です。

以前にも政府を批判した人たちがいましたが、そうした人たちはいきなり地方に左遷されたり、陰湿ないじめにあつたりして辞めていったそうです。異なる意見を言うものに対しては、その内容の是非を論じる前に「協調性に著しく欠ける異端児だ」とのレッテルを貼って徹底的に排除しようとするのです。

「木村盛世口封じペーパー」なるものは実際作成されたようです。しかしそれをばらまく相手はせいぜい厚労省記者クラブという新聞記者の一部にしかすぎません。記者クラブの記者たちは、政府の見解に対してあまり批判的なことは書きません。もし批判をしたら、その記事を書いた新聞社にだけ情報や映像を流さないなどの制裁が加えられるからです。ほかの新聞社がもっている情報が自分たちのところにだけ入らないとなれば新聞社にとって大きなダメージとなるのでしょ。厚労省はこうした間接的な方法で報道の規制をしているのです。